

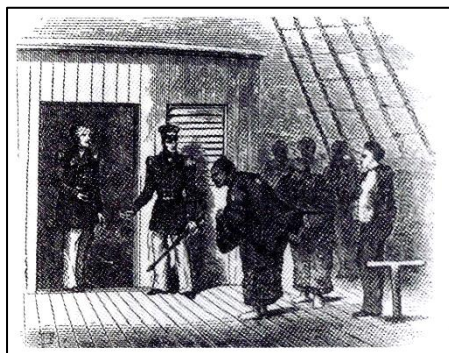
浦賀文化

第73号

令和5年4月1日発行

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

浦賀奉行所の通詞たち



会見風景 (ブキャナン・中島三郎助・堀達之助か)
横須賀人物往来 堀達之助より

与力たちは、まずこの四隻のうちどの船に乗り付けるべきかを判断する必要があった。船に掲げられた旗からこの判断を迷い無く遂げさせ、「I can speak Dutch」と言つて日米の条約締結に至るまでの歴史的な出来事の第一歩となる場面を飾った人物こそはオランダ通詞堀達之助である。

ペリー来航時に浦賀奉行であった戸田伊豆守氏(いづみし)は、このペリーの第一回来航の後で「香山栄左衛門(浦賀奉行所与力)と堀達之助の舌先三寸で数万の人命にも拘わることが平穩に済んだ」と二人の働きを称賛した。

今から一七〇年前の嘉永六年六月(一八五三年七月)、アメリカ合衆国の東インド艦隊司令長官マシュー・C・ペリー率いる四隻の軍艦が開国を求め江戸湾に現れた。ペリーは、日本について可能な限り調べ上げ、過去日本に行ったことのある者の体験なども収集・精査した。そうして得られた知識をもとに、日本に対して断固とした対応をとることを方針とし、旗艦サスケハナ号以外では一切対応せず、またサスケハナ号にあつても認められる者以外は対応もせず乗船もさせないと決めていた。

オランダ通詞とは、もともととは長崎にあつて出島のオランダ商館員たちとの貿易実務を担う者たちであつたが、浦賀に派遣されるようになるのはペリー来航より一〇年前の天保一四年(一八四三年)からで、異国船に対して薪や水といった必要物資を給与して退去させるよう定められた薪水給与令が発令された翌年のことであつた。彼らは三年交代で派遣され、浦賀奉行所に設けられた通詞部屋に常駐していた。

通詞が浦賀に常駐している三年間のうち、普段は何をしていたのかは明らかではないが、堀達之助は幕府の書庫に所蔵されていた砲術に関する書を奉行の命で翻訳したといわれている。また浦賀奉行所与力の一人であつた合原猪三郎はオランダ語を話せたという記録があり、あるいは浦賀奉行所の役人たちに言語について教授することもあつたのかもしれない。異国船が来航した時は、その現場で応接にあつた通訳や異国船から渡された書翰(しょかん)を翻訳するなど重要な役を担っていた。当時三浦半島と房総半島には異国船から江戸を守るために大砲を備えた台場がいくつか築かれていたが、これらの大砲が来航した異国船に向けて火を噴いたことは天保八年(一八三七年)のモリソン号来航時の一例を除いてはなかった。江戸を守るべく機能していたのは結果としては大砲ではなく浦賀に派遣されていたオランダ通詞達であつたと言つても過言ではない。

おける旗艦を意味する旗も知つていたし、旗と言えは浦賀奉行所の役人に検使を意味する白旗の使い方を伝えたことも知られている。また、嘉永二年(一八四九年)にイギリスの軍艦マリナー号が来航した時には、マリナー号の将官と話をしようとした浦賀奉行所与力田中信吾が「今は将官は休息のため席を外しているのだから待つてほしい」とマリナー号側の対応者アトウから言われた時、加福喜十郎という通詞が「西洋には風習として休息をする時間があり、その時に強いて起こし話を進めるのはよろしくない」と助言し、応接を円滑にすすめる一助となつたという記録もある。

オランダ通詞たちはその能力だけでなく、西洋の文化・風習に関する知識を活かし異国船との応接を平穩に済ませる大きな助けとなつたのである。

(山本 慧)

★参考資料

- 『通航一覽續輯』 第四巻・第五巻
- 『ペリー艦隊日本遠征記 上』(万来社)
- 堀孝彦『英字と堀達之助』(雄松堂出版)
- 河元由美子『開港地に於ける黒船艦隊——役人との私的交流及び日本庶民の黒船観察記——』(『洋学史研究』第23号所収)

※今号より、一面を郷土史家・山本慧さん、二面を元横須賀市教育委員会文化財担当・中三川昇さんに執筆いただきました。よろしくお願ひします。

浦賀奉行所跡の発掘調査（その一）

平成三〇年から令和元年に行われた、浦賀奉行所跡発掘調査の概要について、改めてご紹介します。



浦賀奉行所跡は、享保五年（一七二〇年）一二月に開設され、慶応四年（一八六八年）閏四月に廃止された江戸幕府浦賀奉行の役所が置かれた場所で、横須賀市西浦賀五丁目に所在しています。

令和二年（二〇二〇年）一二月に開設三〇〇年を迎えた浦賀奉行所、様々な記念イベントが企画されましたが、残念なことには、世界的な新型コロナウイルス蔓延のため大半の企画が取りやめになってしまいました。しかしながら、現在は「浦賀奉行所及び同心町跡」という名の遺跡埋蔵文化財包蔵地で、横須賀市市民文化遺産「浦賀奉行所跡」でもありますので、市民の大切な文化遺産として末長く保存・活用されて行くことが望まれています。



浦賀奉行所の重要な役割は、江戸（東京湾内）を出入りする船の積荷や乗組員などを管理する、いわゆる「海の関所」でしたが、幕末期には来航する異国船の警護や応対の役割も果たしました。嘉永六年（一八五三年）のペリー艦隊来航時に果たした浦賀奉行所の重要な役割は広く知られています。

ちなみに、「浦賀奉行所跡」として知られている場所は浦賀奉行所の中心部分のことで、江戸時代には一般的に「御役所」と呼ばれていました。このほかに船改めを行った「船番所」や、江戸時代以来の古い町割りも今も残る「与力・同心の屋敷地」、その他の附属施設などがあり、三崎や伊豆の下田にも浦賀奉行所の附属施設がありました。

浦賀奉行所の役所の敷地は、大きく三段階に拡張・再整備されています。その敷地面積は享保五年の開当初は五百数十坪（第一期）、異国船対応のため奉行以下与力・同心などの人員増強を受けた文政四年（一八二二年）に一五〇〇坪前後（第二期）。さらにペリー提督来航後の安政二年（一八五五年）には約一九五三坪に拡張され、ほぼ現在の規模（実測面積約六七〇六坪）になっています（第三期）。この間、幾度も火災や風水害に遭い、その都度補修や増改築、さらには総建て替えなどが行われています。当初の建物は瓦葺きではなく、総瓦葺になるのは文化元年（二八〇四年）に行われた総建て替え以降のようです。浦賀奉行所の廃止から約一五〇年、平成三〇年（二〇一八年）五月、その地に初めて発掘調査の鍬が入りました。

た。調査の主な目的は、浦賀奉行所の遺構や遺物などの残り具合の確認で、平成三〇年度に第一次調査（面積九八㎡）を、翌年度に第二次調査（面積三八三㎡）を行いました。



浦賀奉行所跡の敷地変遷

発掘された主な遺構は、第二期の炊出し所カマド跡・白洲の砂礫敷きと建物礎石、第三期の西側堀跡と柱穴列・建物礎石・石敷き遺構などです。出土遺物では、大量の瓦と共に陶磁器類や寛永通宝、鉄釘他が出土しました。出土された瓦の大半は丸瓦と平瓦が一体化した棧（さん）瓦で、その大半は江戸式瓦と東海式瓦でした。江戸式瓦は江戸とその周辺産、東海式瓦には「三州 喜三郎」・「横濱 仁左衛門」・「三州瓦師仁左衛門」などの刻印がみられ、後に三州瓦の名で知られる愛知県半田市やその近辺で生産された瓦と考えられます。このほか、戦前の場所に浦賀ドックの工具宿舎が建っていた頃の「統制陶器」と呼ばれる食器類も大量に出土しました。

（中三川 昇）

★参考資料

- ・「浦賀奉行所（役所）跡の試掘・確認調査」 横須賀市教委 2021
- ・「浦賀奉行所開設301年 浦賀奉行所跡」 横須賀市教委 2021

分館よりお知らせ

浦賀文化リニューアルに伴い、「俳句の散歩道」は終了いたしました。

今後は、たくさんの方の作品をご覧いただけるように、当館に掲示の俳句コーナーに、応募いただいた作品を順にすべて掲示することにいたしました。

みなさまの投句をお待ちしております！

当館備え付の投句箱に投函するか、メールでも応募いただけます。
uragabunka@yahoo.co.jp



Dock Café ①

明治30年に創設した株式会社浦賀船渠（せんきよ）は、浦賀造船所、浦賀重工、住友重機械工業浦賀工場と社名を変えて平成15年に105年の歴史を閉じた。

浦賀ドックという通称は創業時の社名「船渠」Docksに由来し、創立した時の会社名が今も通称になっている。

ドックとは、海岸などに人工的に構築された船を建造・修理するための施設で、湿ドックと乾ドックがある。

乾ドックが横須賀製鉄所内で最初に造られて以来、日本では乾ドックのことをドックといふことが多い。また浦賀には、煉瓦造りのドックがもう一つある。渋沢栄一率いる東京石川島造船所によって造られた「川間ドック」である。

明治期に日本各地で造られた乾ドックは横須賀にある7カ所を含め80ヶ所、それらの多くは石やコンクリートで造られている。煉瓦造りのドックは世界に4カ所しか現存しない。そのうちの2ヶ所が浦賀に残っているというのは奇跡に近いのだ。

（江）



<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2752/uragabunka/>
浦賀文化のバックナンバーはこちらから→

浦賀文化